

星の夜：文苑

著者	萩星
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 9
ページ	3 9 - 4 7
発行年	1903-05-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5537

星の夜

萩 星

上

高月川の川べりに沿うて、一路菜の花の中を斜に横ぎつたのは、未だ午後の四時頃。

いたいけな昔の夢の跡の、蓮華草、菜の花を見てはどうしてそのまゝ過でされやうに。くゝつたり、つないだり、環にしたり、鎖にしたり凡そ一尺位を右左から。

柳の糸がいきする程、一つの點を中心として、前に後になぶらるゝにも、香をこむる春風がほの見ゆる。

土橋のたもとに、水は一しきり漣を立てゝせうらいだのが、こゝに至つて岸邊の葦の根をかすめて一廻り。

その行く先を見送つて、今左右から一つに結んだ花環を、藍を解かした春の水が、花影を涵す其中頃に浮べた。

たとへば、限りもない譽を得た詩人に、月桂の冠を捧げるかのやう、左右の手に載せて。

水は靜に波紋を畫いたが、そのまゝ右からも左からも、花環を守るやうに浮べて行く。

眼を閉ると、花環の一束一束からは、黄金の光を放つて、上には春の使でもあらうか、榮耀の冠を戴いた數なき童子が、春風の譜を奏して居るやうに思はれる。

空想は、空想の後を逐ふ。

花環と凡そ平行に足はそろゝと。

道はここから左、

流はまづすぐに。菜の花のさくべりをつけ、上には花環を浮べて。

自分はいつまでも行く先を見送つた。

春は行く／＼小川の澗………

花の上を、朗かな聲ばかりすべつて来る。

自分は左に折れた。

日は菜の花の末に落ちらうとして、花の一片一片が、紫と黄と合ひ／＼に閃いて、緑の葉、萌黄の莖にはのかに光を抛つ。

中空は薄く霞んで、落日の弱い光は、底地の紺碧にはんわりと樺色を染めて、地平線上二丈がほゞは、今しがた埧塙を出でた紫金を、刷毛のさきでなでたかのやう、鉄推が一度下つたら、幾億の花が虚空を飛んで、草の葉、木の根、小川の渚、堤の上にも燃わたらう。

蟲の音が何處ともなく起つた、小井手の汀。根芹、蓬の若葉が重り合ふ、あいまからでもあらうか。聲が一つ一つ球となつて、空を飛んで来るやうにも思はれる。

日は段々と沈んで行く。菜の花の中には、白い手拭をかぶつた、里の小娘が見え隠れに北へ北へと消える。

静かな春の夕暮だ。

南は音無川の堤を限つて、北は霞に連る菜の花が、一面にシート形造る。西は高辻、萩津の竹藪、杉木立、寺塔、鎮守の社が菜の花の上、大空の中に黒い側面畫を描き出す。

風は吹かぬ唯、花片、草の葉、柳の小枝が西へ西へと靡て、入日を送つてつゞだつやうにも見ゆ。
。一路菜の花の中を縫うて、高月の村に自分を導く。

村の北側は一帶の竹藪、晚烟が小笹を洩れて、菜の花の上凡そ一尺ばかりをゆるく渡つて、末は極薄く夢のやうに消えて居る。

自分がこの村に入らうとした時、日は南へすぎつて、萩津の森に半分落ちかけてゐた。

梨の花がほの白い生垣の奥には、灯が一つ、小さい聲も聞ゆる。

不意に馬が嘶いた。

茶畑を一つ廻つて、道は南へ折れる。

赤いてがらをかけた小娘が油注をもつて、自分を追ひ越して行く。

杉垣を一つ廻ると、村の八百屋には未だ灯もともさないのに、笑ひさめく聲がする。

道が又南に折れて、さうやかま観音堂の傍に出づる、奉納の旗が一つ、暮れ行く闇を白く染めぬいで、堂の奥には小さな燈明がまたゝいてゐる。

杉杜を過ぐると、道はだら／＼と登つて、音無川の塘に出でた。

日は全く入つてしまつた。入合の鐘が、ポーンと笹の葉、風車花の花辨を振はすと、春の日は蒼々と暮れて行く。

宵の明星が殘照の中に、紫金の點を打つて輝き出した。東からも北からも、西からも南からも、蜜杉垣、竹藪、森を洩れて、四つ五つ、小さい灯が呼吸をついて来る。

蟲の音がはたとやむと、此度は犬の吠ゆる聲が、永く大空を渡つて行く。

扇が岳が向ふに黒ずんで來た。

高い低い、縦に小一里もあらうと思はれる柳原、薄緑、濃緑、淺黄、藍碧に染めませたのが、夕暮の闇に一つ一つ色を失つて、一面の薄黒となる。今しがた、中程の小屋から起つた烟が、小枝を廻り青葉を包んで、ほのかに白う染めてゆく。

道はくの字に柳原へ下りる。

梢を透して、星が一つ一つまたゝき出すと、闇は層々に濃くなる。

星が、

きれくになつて、木の闇を飛んだ。

阿蘇原の根を洗つて、神路、柳瀬の村里に、さらく音を送る音無川が、闇にも白う走つて、すぐ前を。恰も春、花の上に眠る稚兒の、胸に通ふ呼吸のやう、微に叫いでゐる。

柳のしげみを一つ廻ると、音無の渡はここだ。

傍の小石にかけて向を見た。底に青味を帶んだ黒い水が、小さな白い泡を浮べて流れる。

爺さん爺さん、

と渡守の爺さんと呼ぶ。

向岸の川原の中程、榎の木蔭の小さな茅葺が、爺さんの家なので。

灯がちらついていた、黒い影が川原に見えて、やがて汀の船が音も無う、こぼちにやつて來る。水棹が閃つとしたかと思ふと、船はこちらの岸に靜に。

爺さん御苦勞だねー

「はらう遅う、梅が瀬に行かつしやるのか」

自分は爺さんとは、十年來の知己である。

ひどく暑いものだから、衣服は船にぬいで、自分は水中に飛び込み、爺さんの船と、早いのを競つたことのある夏の日も。

雪が水の面に消えて、それを見てゐると、自分は船と一所に、天に上るやうに感じた冬の日も。

今宵も亦、音訪れやうとする梅が瀬の、祖父様の家に行く度毎に。

無言に始まつて、はらゐみとなり、遂にはかなく言葉をかわすやうにもなつたのだ。

六十の坂を越へたと云つたのはもう三年の前。

水棹を岸にあてゝ、やつと一聲云はすれば、追分一つ終らぬうちに向の岸につく。爺さんの追分と云へば、音無川の瀬のせうらくところは、誰れも知らぬものはないほど。

闇は川面をなでゝ流と平行に東から下る。漣の底はどんよりと黒ずんで、船先にあたる白波が僅に呼吸をしてゐるやう。

千鳥が水際を翔けて行く。

爺さん追分を一つつどうだね。

船が今、岸を離れやうとする時、自分がかう云つた。川上から五枚板の船が下る。

城の銀杏に風吹く夜半は、水際千鳥が鳴いて行く。

朗かな、すきどはつた聲が、波のうねり、竹籜、水神の社、櫓の並木に生命を與へて行くと、あとは川波の音ばかり。

爺さんうまいなあ――

渡し船が白い泡を立てた後を、すぢちがひに下る、下り船から起つたのだ。船を岸に繋いで、ザク／＼と石原をふんで、芝生に出ると爺さんの家の前。

下

低い藁天井から、永く下つた煤が、今にも落ちかゝらうとする下で。

一分一分浮世の波が、爺さんの額に皺を刻んで、其間にはのめく一生の悲劇を聞いた時、自分はこの明かな追分のなかにも、或る意味の含まれてゐるをあやしまなかつた。

御城の高殿の跡には、魔神が住んでゐます。

と、青い額が輝いてくる度に繰り返すのであつた、若い息子夫婦が、一人の孫を残して、死の神の手にあやつられたのを思ひ出す毎に、どんなに劇しく爺さんの心臓を壓するのであらうか。

自分は家を出でた。

川風がひやりとして星は一つ一つ深い呼吸をしてゐる。

又塘に上つた。南は御所、吉野の村つゞき、何處からか小唄が聞ゆる。菜の花が闇にも白う、其先から灯が二つ三つ。

物のけわひもない、自分が踏んで行く下駄の音ばかりが、春の宵を占領してゐる。

東に凡う三町も進つて、隠氣な竹藪の、切株、枯枝から、夜の氣がひら／＼と身に泌みる坂を下ると、御所の村中に出づる。

白い手拭で顔包んだ、村の若者が一鞠も喉いそ行つた跡は、夜機織る音が訝わて来るばかり。夜は

段々と更けて行く。

櫻の花がはの白い門を過ぐると、道は追分となる。

右吉野、左梅が瀬。

扇が岳が音無川にはひこまうとして、ここに一なだれうつて高まつたのが城跡の森。

小田すき返す百姓が、煙管唧いての昔談に、城門高樓などを、臆げの幻影に畫くのみで。落花の風の白い頃、矢叫びの聲がしたのも、今は搦手の石垣に、臺のみ茂つて、昔高殿のあつたと傳る跡には、御城の銀杏と呼ばるるのが唯一本、そこには死の神が住んで居るとの噂さ。恐れて近よらぬものは敢て小供ばかりではない。

道は闇から闇に導いて、森の中に入つた。櫟林が左右から折重なつて森の音が高くする。

空は一路梨地の帯と狭められて、銀河が横さまにかけ渡してゐる。

風がサツサツサツとやつて來た。

一切の木の葉、草の莖、小さい枝、自分の髪の手までが、一度にサラ／＼と音させる。

頭の毛から爪さきまで、氷のやうな氣がスツト通る。

星が又斜に森から森に消れた。

城跡の銀杏！

大洋の海に立つて、千萬里先から蒼溟の風に鞭うつて來る響を聞くやうに、何處からとはなしに、かう耳元に呟く。はつきりと聞えるのでもないが、底力のある呟が、一分一分自分の身を下に押しつけるやうで、呼吸は段々せわしくなる。

文

前からも後からも、上からも下からも、右からも左からも、闇の中のありとあらゆるものが、ひしひしと自分に押迫つて、岩の根、笹の葉、木の幹、土塊が一つ一つ動き出すやうにも思はれる。夜の氣が段々濃くなり、自分の氣は漸々に遠くなつて、耳には叫喚の響がする。突然大地が浮き出して、足は宙を踏んで居るかのやう、感覚が少しもない。夢中に走り出した。

凡そ何秒過ぎたらうか……………。

灯が！。

氣がつくと、自分は岡の最高所まじ來て居たのだ。向の谷あひに木の間を洩れて灯が一つ。

もう大丈夫と思ふと、世が急に廣うなつたやうで、今迄のことが何だか可笑くて、まだ呼吸がせわしい。

森の方をふり返つた。

杉、栗、櫟、松の尖端からは、夜の氣を大空に吹きかけるやうで、星はそれと一所にまたゝくのもあらうか。今にも黒い形をしたものが、その間から飛び出しはしまいかと思はれる。

トタンに又星が森を掠めて飛んだ。

尖つたり、圓くなつたり、三角四角に空に黒い輪廓を形作る森が、一なだれ低うなつて、それが又一つ勢をつけて、高うなつたのが城の搦手の石垣である。

少し左手に、下をさしのぞくやうになつて、高く空に手を擴げてゐるのが彼の銀杏で、地の上二丈位からは枝が二つに。

そのは異変に天を揺して、左のは四十度位の角度で横にはびこつてゐる。また葉の少ない枝は葉は夜目には黒う、夜の神のうのまゝの形。

そんな悪魔が仕んで居るのか、其下に生ゆる、萱、茅、杉菜、卯の花、凡てが戀のなやみ、怨の炎、嫉妬の業火を満して、それを犯すものは、何ともしれぬ毒氣に觸るゝと傳へられる。

夜氣が地上に充ちて、人々が夢に落ちた時、彼處の森、この谷あひから、何とも知れぬ氣が湧いて、かの枝を包むとも噂せらるゝ。

自分はろんなことを信ずることは出来ないが今の先、渡し場の爺さんが一生の悲劇を聞いてから。何かの因縁が、其間に絡まつては居まいかとも思つた。

敢て戀の神が住つて、それが人間の聖き戀を嫉んで、毒矢を射たのが、彼等二人の心臓を貫いたとは思はれない。

が、彼の天を刺しうな銀杏の枝を見て、そこに怨の炎が燃やないとはどうして思はれやうに。冷たい風が颯つと來た、自分は身振をして立ち上つた。

道は下りくゝて麥畑と桑畑の間を貫いで、梅が瀬川の岸に出づる。

危くかけ渡した土橋を左に折れて、茶畑の横、杉垣の門、そこが祖父様の家なのだ。

ア、星の飛ぶ夜である。

(完)

